
恋に愛されない男

神越優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋に愛されない男

【NZコード】

NZ344D

【作者名】

神越優

【あらすじ】

冬、細く細く長い道。そこを歩く一人の男。彼は歩いてきた道を振り返る。人生という、長い道を・・・その先にある分かれ道を、彼はどう選ぶのか・・・恋愛に恵まれず、20年を生きてきた、人の男の物語・・・

～プロローグ～（前書き）

はじめまして、神越優と申します。

久しぶりに小説を投稿することになりました。

皆様のお目に止まり、大変光栄です。

さて、この小説はちょっと特殊な書き方で仕上げようと思つています。

主人公、その他登場人物の心情を、なるべく直接書かないように・・・
・と。

皆様それに、それぞれの印象を持つていただけたらいいなと思
いまして。

その辺りを理解していただき、拙い文章ですが、読みづらいのを
我慢して頂いて読み進めていただけると幸いです。

では、『恋に愛されない男』ご覧ください・・・

「プロローグ」

サクツ・・・サクツ・・・サクツ

細い細い、真っ直ぐな道。敷き詰められたアスファルトには、細い道の割りに車が通るせいか、タイヤの焦げ付いた跡や、小石が散らばっている。右を見ると、地方の駅の名前の由来にもなっている川が流れていて、反対側には、全国的に有名な会社の工場が、音も立てずに静かに佇んでいる。

川岸には、多くの木が根を張っていて、その道は数多の落ち葉に埋もれてしまいそうだつた。毎朝、工場の清掃員が、壁の外周を掃除するおかげで、落ち葉は道の脇に一除けのけられていた。

サクツ・・・サクツ・・・サクツ・・・

枯れ果てた落ち葉が踏まれて、その身を折られ悲鳴をあげる。それを見面白そうに、寒さこより白くなつた息を吐きながら、わざと落ち葉の上を歩く。

サクツ・・・サクツ・・・・・・

立ち止まり、お気に入りのメンソール煙草を一本取り出し、口元咥えてから百円ライターで火をつける。

・・・フウウウウ～・・・・

すっかり白くなつた吐息と、煙草の煙が混じり合い、少し乾燥してしまった唇から吐き出された後、北風に揺られて消えていく。

細く、少し垂れ気味の田をさらに細くして、雲ひとつ見えない青空を、男は見上げた。

20歳の冬、男は工場に勤めていた・・・

馬鹿でかい・・・それが一番適切な表現だろ？この地域の中でも相当広い敷地を持つたこの工場は、全国でも五指に入る有名な工業会社の下請けを行つてゐる。

その工場の門前には、警備員が立つてゐる。

「おはようございます」

警備員が言つと、男は財布から通門証を取り出し、警備員に見せながら同じく挨拶をした。

門を抜けて、しばらく歩いてから更衣室のある建物に入り、制服に着替え、彼が仕事をしている現場に向かう。

工場内には幾つもの建物があり、たくさんの社員が、それぞれの職場がある建物に入つていいく。

建物の中には、小さなゲート。IDカードを^{かざし}翳し、暗証番号を入れるとゲートが開く。

そうして、男は職場に着き、パソコンを開き仕事を始めた。

「おはよう、相川」

男に声を掛けたのは、ふつくらした中年の男性だった。目は大きく、少し垂れていて優しげな印象を持てるような笑顔が特徴的だ。

「おはようございます。立野さん。今日も早いですね」

相川と呼ばれた男は、立野と呼んだふつくらした男に微笑みながら挨拶をした。柔らかい笑顔が印象深い。細く垂れた目が更に柔らかい印象を与えるのだろう。

「相川～、今日は食事会だからな！夜空けとけよ～！！」

立野が少し小さめな声で、相川の肩を小突きながら囁いた。

「だから行きませんってば・・・食事会だなんて、よく言いますよ～合コンってはつきり言やあいいじゃないですか・・・」

相川の柔らかい笑顔が引きつっていた。

「ダメだダメだ！若いやつ連れて来いつて言われちまつたんだ！相手は大学生だぞ！年近いのはお前だけなんだ！！頼むつて！凜ちゃん今夜仕事だろ？絶対ばれないって！」

立野が手を合わせて頭を下げる。

「・・・そんなの俺が行つたところで盛り上がりませんし、喜びませんよ？」

「大丈夫だつて！元ホストだろ？持ちネタいつぱいだろ？」

小さく鼻で笑つた相川は、

「凜に金預けてんだから、立野さんのおごりつすよ？」と釘をさしてから了承した。

仕事が終わり、相川は立野と共に、駅前の居酒屋に向かつて歩いていた。

工場は駅から大通り沿いに歩いて15分の距離にあつた。駅から歩いてくる人や、バスで通勤する人も多いこの工場は、駅周辺で最も人口が多い職場だつた。

「待たせてごめんね。紹介するよ、後輩の相川だ」

店に入るなり、立野は女の子2人が座る席に向かつていき、挨拶した。

「相川翔輝（しょつき）です。立野さんには半年間お世話になつてます」

相川は頭を下げながら、女の子たちに自己紹介した。

デニムジャケットを羽織つた、ショートカットの女の子が、

「よろしく。あたしは黒田理恵子、で、こっちが笹沼美樹。立野さんはうちの居酒屋の常連なの」と同じく頭を下げた。

「よろしくお願ひします」

笹沼と紹介された女の子が微笑んで会釈した。長い髪をウェーブさせていて、千鳥柄のワンピースに、黒のベロアジャケットを羽織つていた。目は大きく、鼻は少し潰れているが、小さめで、唇は、口紅が薄く、全体的に顔は小さいほうだった。スタイルは、少し太

つているが、肉付きがいい方で済むくらいだった。

黒田は、ショートカットの黒髪が途絶えた辺りから、大きいリング状のピアスが目立つ、少し色黒の女の子で、目は細く吊り上っている。が、キツイ印象を与えるその顔立ちとは裏腹に、口調こそ荒っぽいが、穏やかな喋り方だった。

「じゃ、なに飲もうか？」

立野が笑みを浮かべながら、3人に聞いた。

「俺生ビール」

「あたしも生」

「あたしはカルーアミルクでお願いします」

「了解。店員さん、注文おねがいします。生3つ、カルーア、・・・
・以上で」

立野が注文を終えてすぐ、店員が飲み物とお通しを人数分持つて、戻ってきた。居酒屋というのは、店によるが飲み物を持つてくるのが早いところが多い。

「じゃ、お疲れ～」

立野が言ったと同時に、4人はグラスを合わせ、カツンと小さく鳴らした。

「えっと・・・お仕事はなにされてるんですか？」

笹沼が少し遠慮がちに発言した。こういう場所に慣れてない様子だった。

「じめん、言えないんだ。企業秘密ってやつ?でも、とりあえず工場に勤めてるただの会社員だよ」

立野が少し唸りながら言った。

ガヤガヤと大勢の客が喋り合つ声で、週末の居酒屋はにぎやかだつた。大手チェーン会社の居酒屋というのは、どこでも見ることができるだけあって人気だった。

「相川・・・くん?だけ?いくつなの?立野さんも」

黒田がピンク色の煙草ケースから長い煙草を取り出し、咥えて火をつけた。

「俺は今年で29になつたよ。で、相川は20だ」

立野が少し声のトーンを低くして、常に浮かべていた気持ちのいい笑顔を引きつらせて言つた。

「うつそ？！美樹とタメ？！で、工場なんかで働いてんの？大学は？！」

黒田が立て続けにテンションを上げて質問する。

「いや、高校中退したから

相川、いや、翔輝は煙草の煙を吐き出しながら、煙と共に吐き捨てるように言つた。

「そなんですか・・・でも、なんで？」

笹沼がグラスに口を付けながら問う。

「進級できなくて。かつたるくなつたから・・・」

「そ、で、バイトも続かなくてホストに走つたんだよなー！」

待つてましたとばかりに立野が口を挟む。

「マジ？！元ホスト？！げえ～キモい～！！！」

黒田はビールを飲み終えてから、大きな声で批判した。

「なにが？ホストのなにがキモい？」

翔輝は煙草を咥えて火を点けた。

「大した顔じやねえくせにナルシストなとこ！女が皆カツコイイ自分に抱かれたいとか思つてつからだよ！」

黒田はだんだん声を荒げて言つた。

「ちよつと理恵！言いすぎ・・・」

笹沼が止めに入ろうとしたが、

「笹沼さん？だよね。いいよ。そういう奴もいるのは事実だし」

翔輝は微笑みながら煙草を吸つていた。

「ほら、あんたはそうじやないみたいな言い方してんじやん！自覚してねえのをナルシストつーんだよ！」

黒田は煙草を大きく吸つて、ビールをまたグイッと飲み干した。

「俺は違うよ。指名も取れなきゃヘルプもできねえからやめたんだ。この顔だからね。モテしたことなんか一度もないし。な、自覺し

てるだろ？だからナルシストじゃない」

微笑を残したまま翔輝はビールを煽った。

その話を黙つて聞いてた立野は声を押し殺して鼻で笑つた。

「・・・悪い悪い。だって自分のこと卑下しすぎだからさ」

篠沼も多少引きつりながら、同じように笑つた。

「そうですよ。全然カツコイイじゃないですか」

それを聞いた翔輝は、鼻で笑つてから沈黙を通した。

自己紹介も終わり、他愛ない話が続く中、 笹沼が声のトーンを落として、翔輝に話し掛けた。

「相川さん・・・ごめんなさい。理恵・・・前にホストやつてた人に騙されて・・・何股もかけられて捨てられたの・・・だから」

翔輝は、少し俯きながら煙草の煙を吐き出した。

「・・・なるほどね。だからか・・・ん、大丈夫。気にしないし」

それを聞いた笹沼は力無く微笑んだ。

「ねえ、立野さん。緒方さんまだなの〜？」

突然、黒田が声色を高くした。

「・・・緒方さん？」

翔輝が目の前に座っている 笹沼に訊ねると、

「よく知らないんだけど、理恵が働いてる店によく立野さんと来るらしいの。合コンはその人を紹介してもらう代わりに用意したの」
 笹沼は少し慣れてきたのか、既に敬語を使わなくなっていた。

「そ！あんたみたいな元ホストと違つて優しくてカッコイイ大人の男！」

黒田が翔輝を睨みながら煙草を吸つた。黒田が吸つている煙草は女の子に人気のあるピンク色のパッケージでロングのメンソール煙草だ。

「理恵！いい加減にしなつて！相川さんに突つ掛かつてどうすんの？！」

笹沼がテーブルを叩いた。

「美樹は黙つてて！元つづつたつてこりにうやつは結局女なんかやるために道具くらいにしか思つてないのよー違う？ー」

黒田がテーブルを叩き返した。

「まあまあ。黒田さん、相川はそんなやつじゃないから」立野が間に入ろうと黒田を宥める。

「女はやるための道具って……んなもん逆にお前みたいな女とやるやつのがおかしいと思つたじね」

翔輝が鼻で笑つた。

「……つだとてめえ……！」

黒田が立ち上がる。

「ちよつと理恵！相川さんも！今のは……」

笛沼が口を挟もうとしたが立野に手で遮られた。

「女の子に失礼な」と言つたんだ。自分でこの場を抑えてみる

立野が翔輝を睨んだ。

「わかつてますよ、立野さん。……とりあえず座れよ」

翔輝がため息をついてから煙草を手に取つた。黒田は息を荒くしていたが、ドカッと勢いよく座り、同じく煙草に手を取つた。

「どういうことよ、さつきの」

翔輝は大きく煙草を吸い、煙を吐き出し、話を始めた。

「グダグダ過去を引きずつてる女とやりたい男なんかいねえってこと。俺だったら、自分のことだけ見てくれるやつとじゃなきゃやりたくないし。ってか本気で好きになれない。逆に聞くけど、合口ン来て昔の女を引きずつて当たり散らしたりため息ばつかついてるやつを狙うか？」

黒田は少し俯いて、煙草の煙を吐き出しながら、

「悪かったわよ」

と小さく言つた。

翔輝は顔を崩しながら、

「いや、こっちも失礼な」と言つてごめん

と頭を下げる。

「で、その緒方さんつて人は？」

翔輝が立野の方に顔を向けた。立野は飲み物を焼酎に替えてグラスを手で弄んでいた。

「ああ、俺の古くからの友人なんだ。」
「いらっしゃるはすなんだが」

「いらっしゃ来てから？」

「 笹沼が首を傾げた。大きい瞳が目立つ顔は酒のせいか頬が赤くな
つていてる。

「ああ、俺さ、高校出てからすぐこっちに来て今の会社に就職し
たんだ。で、そん時に同じアパートに住んでたのが緒方なんだ。年
も同じだから気が合つてさ」

立野が酒を口に運びながら説明した。

「・・・じゃあ、人数合てるし俺が来る必要なかつたんじゃ・
・?」

翔輝がまた煙草に火を点けた。

「あ、今日3対3だから。帰っちゃダメよ!」

黒田が翔輝に顔を近付けていった。翔輝はすかさず顔を引いた。

「・・・なんかあの二人、最初の雰囲気どこへやらつて感じです
ね」

「 笹沼が引きつった笑顔を浮かべた。

「元が気が合うんだろうね?似たもん同士つていうか」

立野も苦笑を浮かべている。

「全然似てないと思うんですけど・・・」

「性格じやなくて・・・過去が、さ」

立野は言い切つてから追加の注文を頼むために店員を呼んだ。

「過去・・・?・・・騙された?相川くんも?」

「 笹沼は、隣で言い合っている黒田と翔輝を見ながら呟いた。

「すいません、ちょっとお手洗い・・・」

「あ、あたしも！化粧直すから！」

笹沼が席を立つと、慌てて黒田も席を立つた。

居酒屋は化粧室が重要な役割を果たしている。

食事をする時は賑やかでもいいが、用を足すときは、清潔で、静かなどころを希望するのが人間の性だ。羞恥心がある人間なら誰でも騒がしいところでは落ち着かないものだ。特に、化粧などを行ったり秘密のお喋りなどを行う、女性は特に。だからこそ、この居酒屋は奥、見つけにくいところに設置してあるものの化粧室を広く、綺麗にをモットーにしていた。なのでとても女性に人気のある店だった。

「美樹、で立野さんはどうなの？立野さんはあんたを紹介してくれって言つたから合コンにしたのよ？」

黒田がアイラインを整えながら笹沼に問い合わせた。

「・・・つとにわあ・・・あんな中年、こつちは勘弁だつて！なんのあいつ？！一コ二コしてるだけでつまんないし！まだ大手会社の会社員つてのが救いだけどね！」

笹沼はファンデーションを塗り直しながら吐き捨てた。

「じゃあなんであんたあんなキャラ必死に作つてんのよ？いつも気に食わなくなるとすぐ本性出すくせに・・・」

鼻で笑いながら黒田はチラツと笹沼を見た。

化粧している笹沼の表情はふくつと頬を膨らませている・・・ではなく、口の端を吊り上げ、声を殺して笑いながら、その口の端で黒田を捉えている、先程の柔らかでおじとやかな表情はそこにはなかつた。

「・・・あんた、バカじゃないの？さつき相川とかいうバカはあ言つてたけど、結局男は女なんかただの穴にしか見てないんだつて。だからこっちも騙されないようにキャラ作つて一步下がつて冷静に品定めすんの！抱かせてやる価値があるかどうかをね」

笹沼はフツと鼻で笑い、黒田の方へ向き直した。

「でも、あいつの言つことわかるよ？たしかにあたし男だつたら、さつきのあたしは好きにならないし・・・なんか直に言われて嬉しかつたし。立野さんだつていい人だと思うし」

黒田も化粧の手を止め、笹沼の目をじっと見た。

「だからあんたはホストなんかに騙されんのよバカ！あいつは好きにならないつて言つただけ！男が皆やりたくないとは言つてない！言い包められたのよ！わかんなかったの？！」

笹沼は堪え切れなくなつたのか、急に声をあげて笑いだした。

「・・・あつそ！どうせあたしはバカだよ！あんたみたいに六大なんて絶対行けないからね！」

黒田が勢い良く口紅を洗面所に叩きつけた。

「・・・ま、いいよ！で、結局あんた今田どうすんの？まだ猫被つてんだからどっちか狙つてんでしょ？」

笹沼の手から口紅を奪い取り口に当たながら、黒田は小さく笑つた。
「笹沼は黒田の口紅を取り、弄んだ。

「・・・ま、いいよ！で、結局あんた今田どうすんの？まだ猫被つてんだからどっちか狙つてんでしょ？」

笹沼は手を洗いながら冷たく言い放つた。

「ん、まあカツコよくないけど中年より元ホストかな。仕事は同じなんだし。金がそこそこあんならそりや若さとSEXが上手い方でしょ。それに、後から来るやつはあんたのでしょ？」

「ありがと。でも、あんたの友達どうすんの？後から来んのはいいけど、別行動すんでしょ？来てすぐ解散になるじゃん？」

黒田も同じように手を洗う。

「ん、あの子はいいの！家近いから呼んだだけ。いい男いなかつたら泊まろうと思つて。あの子を、もつ男作らないし」

「・・・なんで？」

笠沼は黒田を無視して、突如俯いて呟いた。

「相川も過去・・・か。あの子もこの子も過去があれだから・・・

相川の過去知つとく必要ありそつね」

「え、なにそれ？」

黒田は聞き返したが、

「ううん、なんでもない！行こ？待ってるよー」

と、にこやかな笑顔ではぐらかされた。

「で、どうだ？」

立野が2杯目の焼酎、緑茶割りを口に運んだ。

「どうてなにがですか？」

翔輝が三杯目の生ビールを煽りながら答える。

「理恵子ちゃんと笹沼ちやんだよ。どっちか気に入つたか？」

翔輝は目を大きく見開いた。わかりやすく言えば丸くしたというやつか。

「俺は人数合わせでしょ？ 気に入るも糞もないじゃないですか！」

立野がおかしそうに笑う。

「人数合わせでもせつかく合コン来てるんだ。誰かと仲良くならないともつたいないじゃないか」

「そんなの凜が許さないっすよ」

翔輝が鼻で笑いながら煙草に火を点けた。

「・・・お前さあ、凜ちゃんと別れられないのか？」

立野がグラスをテーブルに置いて、真剣な眼差しを向けた。

「別れられたら・・・こんな人生歩んませんよ。今だって、ホストやってたかもしないっすからね」

翔輝は少し俯いて小さく笑った。

「そう・・・だよなあ・・・でもさ、もしあ前が誰か好きになつて、その子と一緒にになりたくなつたらどうすんだ？」

「それはないっすよ。もう俺はあの子以上好きにならない。あの子を忘れられないんすから・・・凜と付き合つてから、ますますその気持ちが強くなつて、今の凜といるのは苦痛ですけど・・・逃げられないって事実があるおかげで、あの子を忘れられますからね」

「・・・いつも話してる子か。わかつたよー緒方ともう一人が來たら、すぐお開きにしよう。もともと、お前の為だったからな、この合コンは。まあ、理恵子ちゃんが緒方を気に入つてたから、その

気持ちは優先するけどね」

翔輝はまた小さく鼻で笑つた。

「・・・なんか一言欲しいっすね、そういう時は」

「先に一言言つたらお前断るだろ?だから笠沼ちゃんを紹介してくれつて嘘ついて合コン組んでもらつたんだ。で、一人あぶれるようになればお前は断れないだろ?」

立野は口の端を吊り上げて笑つた。

「そんなこと言つたんすか?じゃあ向こうは・・・」

「あのぶりつこ、今頃中年に氣に入られてキモイとか言つてんじやないか?」

翔輝は頭を抱えてため息をついた。

「立野さん・・・」

立野は含み笑いをしながら、

「まあいいじゃないか。適当に緒方を紹介して帰ろう」と言つてからグラスの中の緑茶割りを飲み干した。

第一部『企画』～4～（後書き）

今回は短めに終わりました。早くも百人近くの方に御覧になつて頂いて、とても光栄です。少しづつ話は展開してきますが、まだ本題には全然入っていません。先は長いですがお付き合いいただけると幸いです。感想・評価など、まだ話が短く、つけずらいと思いますが、なにか一言いただけると嬉しく思います。では、これにて失礼させていただきます。

「『めん、お待たせ』

黒田と笹沼はそれぞれ鞄を持ったまま、席に着いて、飲み物を飲んだ。

「緒方さんは？まだ来ないの？」

黒田が立野に話を振つた。

「うん、まだ連絡はないね。残業が多い職場らしいんだけど」立野が携帯を開きながら言った。

「そつかあ・・・ねえ、美樹？美樹の友達はいつ来るの？」

黒田は煙草を鞄の中から取り出しながら言った。

「ええと・・・今大学からこっちに向かってるってメール入つてた」

笹沼が携帯を操作しながら答えた。

「もう一人は大学生？」

緑茶割りの入ったグラスを傾け、中の氷をグラスとぶつけて遊びながら、立野が訊ねる。

「うん、美樹と同じ大学の子。この子すつごい頭が良くてさあ！六大学の内一つに通つてんのよ！経済学部に」

「・・・すげえじゃん。で、黒田さんと笹沼さんはどういう関係？なんかさつき年違うみたいな言い方だつたし、大学も違うみたいな言い方じゃん？」

煙草を吸いながら、顔を少し歪めて翔輝は言った。

「ああ、理恵はあたしの高校の時の部活の先輩。テニス部のね。あたし、高校は公立で、一生懸命勉強して今通つてる私立の大学に行つたの。将来やりたいことあつたからね」

微笑みながら笹沼が答えると、翔輝は頷きながら煙草を吸つた。

「そういえば、相川。お前も頭良いんだよな？結構頭良い私立大學の付属だろ？お前の高校？」

立野がニヤニヤしながら翔輝の頭を小突く。

「やめてくださいよ・・・所詮中退なんですから・・・」

翔輝が頭をさすりながら、また顔を歪める。

「そうなの？凄いじゃん！元ホストのくせに」

黒田もニヤニヤしながら翔輝の頭を小突いた。

「もう、理恵！やめなつて！相川さん困ってるじゃない！」

笹沼が黒田の手を掴んだ。

翔輝は、煙草を灰皿に押しつぶして、

「ちょっと便所」

と残して、足早に席を立つた。

「ねえ、立野さん。さつき言ってた相川さんの過去って？」

翔輝が化粧室の方へ消えていったのを見届けた笹沼は、すかさず立野に真剣な眼差しを向けた。

「ん～？ああ、相川ね、昔凄い好きだつた人がいたらしいんだ。でもね、色々あって、結局実らなかつた。それだけだよ」

立野は新しく頼んだ日本酒の熱燄を美味そうに啜つた。

「色々？色々つてなんですか？」

笹沼が更に問い合わせようとした時、

「あの、遅れてすいません・・・」

大きな目、日本人には珍しい、彫りの深い顔立ち、唇は小さく、髪は長く、綺麗なストレート・・・美人と形容できる顔立ちとは裏腹に、グレーのパーカーの上に黒のダウンジャケット、ブーツカットのデニムパンツと、ラフな格好で身を整えた、少し幼さの残る女性が3人の前で頭を下げた。

「亜由美！遅いじゃない！」

笹沼は頬を膨らませて大声を上げた。

「岡里亜由美です。遅れてすいません」

紹介された岡里は、もう一度立野に向かつて深々と頭を下げた。

「ああ、どうも。立野祐一です。よろしく。こつちはまだあと一

人来てないんだが、もう一人は今お手洗いに・・・ああ戻ってきた。

紹介するよ。相川だ」

立野がにつこり笑つて、化粧室から戻つてきた相川を岡里に紹介した。

翔輝は目もくれず、煙草を咥えて、ライターで火を点けた。

「相川・・・翔輝・・・？」

フルネームで呼ばれた翔輝は、顔を上げた。その口からは煙草が零れるように落ちた。

「岡里・・・」

翔輝と岡里はお互い、目を見開いたまま、止まっていた。

翔輝は丸めて席に置いてあつた黒のロングコートを掴んだ。

「俺帰ります。立野さん」」馳走様でした」

視線を下に向けたまま、足早に立ち去らうとした翔輝だったが、立野に腕を掴まれて立ち止まつた。

「ダメだろ、全員揃つてもいないので帰っちゃ。それに岡里さんに失礼だろ？ さあ、座れ座れ」

翔輝が立野の顔を見ると、立野は満面の笑みを浮かべていた。翔輝は大きくため息をついて、席に座り、煙草を咥えて、火を点けようとしたが、何を思ったか、咥えた煙草をそのままケースに戻した。

「なにやつてんだ、お前？」

立野が不思議そうに目を丸くしたのと、笹沼が、ほんの一瞬だったが眉間に皺を寄せたのは、ほぼ同時だつた。

「私が煙草の煙苦手なの覚えてたんだ」

岡里が翔輝を見据えたまま、口を開いた。

「吸いたくなくなつただけ」

翔輝はボソツと呟いた。

・・・パンツ！ ！ ！

乾いた音が鳴り響き、翔輝の頬は赤く腫れ、岡里は息を荒くしていた。

「え、ちょ・・・」

・・・パンツ！ ！ ！

黒田の静止の声を遮つて、また岡里の平手打ちが翔輝の頬に炸裂した。

「なに考えてんの！ あたしがどんな気持ちでいたかわかつてんの？」

「？」

岡里の大きな瞳は、透明な雫で今にも溢れそうなほど潤つっていた。

「・・・知らねえよ・・・お前の気持ちなんか・・・わかんねえ

よ・・・

翔輝は田の端で岡里を捉えながら、咳いた。

「知らねえ？！ふざけないでよ！あたしがどれだけあんたを探したか・・・あんたの高校の友達にあんたの事聞くためだけに、あたしはこ大受けたのよ？あんたが中退することもそこで知つたし、あんたがホストやってるって聞いたから新宿だつて行つたし！でも、全然見つからなかつた・・・どんだけ心配したと・・・」

「ハイ、ストップ！」

更にビンタを翔輝に放とうとした岡里の腕を、綺麗に黒髪を整えた、中年男性が掴んだ。無精髭が目立つ顔には、引きつった笑顔が浮かんでいた。

「慶介！」

「緒方さん！」

立野と黒田の声は、ほぼ同時だつた。

「綺麗なお嬢さん？皆驚いてるよ？」

緒方は立野の方をチラリと見てから、岡里に視線を向けた。

周囲の人々は、何事かと翔輝達の席の方をチラチラ盗み見ている。居酒屋特有の喧騒は、今はなかつた。

「・・・すいません、取り乱して」

岡里は翔輝をもう一度睨んでから、席に座つた。

翔輝はずつと俯いたまま、一言も喋らなかつた。

「出ようか？この店にはさすがに居辛いだろ？」

立野が伝票を持つて、コートを羽織りながら言った。

一同は無言で立野に続いて、帰り支度を始めた・・・

第一部『アーヴィング』～6～（後書き）

今回も短めに終わりました。

次回、第一部最終話の予定です。
第一部からが、本編となります。
皆さん、お付き合いで下さい。

「ありがとうございました」

食後の板ガムを全員に配り、頭を下げた居酒屋の店員は、一同をチラチラ見ながら仕事に戻つて行つた。

「で、なにがどうなつたんだい？」

緒方はガムを口に入れながら立野に聞いかけた。

「いや、俺も訳わからん……岡里さんは相川と知り合いか？」

？

立野が眉に皺を寄せたまま、岡里に顔を向けた。

「ええ、中学の時からの知り合いなんです。同じ塾だったんですけど、高校行つてからも連絡は取つていて……」

岡里は俯いたまま言つた。

「それで……突然連絡が途絶えて……心配になつて色々心当たりは当たつてみたんですけど……見つかなくて……」

「諦めかけていたら見つかった……と？」

緒方が岡里の顔を覗き込むと、岡里は鋭い目で翔輝を睨みながら・

・泣いていた。

「つまり……元恋人？」

黒田がニヤニヤしながら翔輝を小突いた。

「……違う」

翔輝はそれだけ呟いて、足早に帰ろうとした。

「また逃げるの？！」

岡里の怒鳴り声が、翔輝の足を止めた。

「なんでよ？！あたしがなんかした？！そりや……色々あつたけど、避けられるようなことしたつもりないよ？！なんかあんななら言つてよ……謝るから……避けないでよお……」

堪え切れなかつたのか、岡里はしゃくり声を上げながら涙を零して泣き始めた。

「『めん、岡里……でも、』めん……」

翔輝はそれだけ言い残して、岡里の方を見向きもせずに歩き始めた。

「相川……くん！待つて！」

笹沼は、ちょっと困ったように岡里をチラリと見たが、黒田に、「後で連絡するから！亜由美よろしく！」

と残して、翔輝の後を追つた。

「美樹……マジかよあいつ……」

黒田は頭を搔きながら、咽び泣いている岡里を見下ろした。……

マジ泣きだつた……

「これは……どうすればいいんだろうねえ……？」

緒方が立野の肩に手を乗せてため息をついた。

「……どつか違う店に行くか、とりあえず……ほっとけない
し……」

立野も同様にため息をついた。

「ちよ……待つて！」

笹沼は翔輝に追いつくと、翔輝の腕を掴んだ。が、それを気にも留めず、翔輝は強引に歩き続けようとする。

「待つてってば！」

グイッと、弱い力を振り絞つて、腕を引くと、翔輝はやつと立ち止まり振り返つた。

「なんか用？」

翔輝はため息をつきながら笹沼を見た。何の感情も読み取れない、冷たい表情で。

が、それを見た笹沼は、鼻で笑つた。

「……とりあえず、どつか行きましょ？飲み足りないでしょ？」

突如態度を変えた笹沼に、少し驚いたように目を見開きながら、翔輝は笑つた。

「猫かぶるのはやめたわけ？」

見下したような翔輝の視線を正面から受け止めて、 笹沼は満面の笑みを浮かべた。満面の・・・悪魔のような・・・笑みを。

「あんたには意味ないでしょ。が。中年がいたから猫かぶつてただけよさつきは。で、行くの? 行かないの?」

笹沼は翔輝の腕を抱きかかえた。自分のふくらとした胸に当たるようだ。

「気持ち悪いんだよ、そういうの。ただ話すだけなり行つてやる。でも、色仕掛けみてえなことはやめる。な?」

翔輝は 笹沼の胸倉を掴んで、ガンを飛ばしながら吐き捨てた。

「聞きたいことがあるの・・・わかつてたんだ?」

笹沼は翔輝の腕を振り払つて、笑みを浮かべた。

「じゃなきやお前みたいなのが一人の男にそんな執着しねえだろ?」

翔輝は煙草を取り出して、一本咥えた。

「じゃ、行きましょ。相川くんの好きな店でいいわよ。話聞く代わりにあたしがおごるわ」

翔輝の腕を掴みながら、 笹沼はまた笑みを浮かべた。

「なら、すぐそこのBARでいい。よく行くんだ。静かだから落ち着く」

翔輝は駅前のドーナツ屋の上にある、BARを指差した。 笹沼は黙つて頷き、翔輝の腕を引っ張りながら歩き出した。

「で、なにが聞きたい?」
翔輝はウイスキーの入ったグラスを傾けながら、煙草を一口吸つた。

「岡里亜由美は元カノ?」「違う」

カクテルグラスに入つた色彩が美しいカクテルと、その中に添えられたチエリーを恋しそうに 笹沼は見つめている。
「じゃあ、セフレとか?昔の客とか?」

「お前、さつきの話聞いてなかつたのか？」

翔輝はまた、深いため息と共に、煙を吐き出した。

「だつて、さつきのは明らかにそういう感じでしょ？女が振られて、未練タラタラつて感じ。そんで、それをあつさり突き放す遊び人の男！」

ズバリでしょ？と言いながら 笹沼はいやらしく微笑んだ。上着を脱いで、アルコールで頬を赤くしている彼女は、艶やかで色っぽかつた。

「振られたのは俺だよ

「えつ？！」

笹沼は目を見開いて 翔輝に詰め寄つた。

「どういうこと？」

「くつくな、うつとうしい！」

翔輝が、 笹沼の肩を優しく押して、突き放した。口調は冷たいが、彼の行動には女性に対する優しさがあつた。

「ねえ、どういうこと？もし亜由美があんたを振ったなら、どうしてあの子があんたを追っかけるのよ？」

「知らねえよ」

翔輝は俯いて、ため息を吐いた。

「酒

「えつ？」

翔輝がフツと鼻で笑つてから微笑んだ。

「酒、おじつてくれたからな。話してやるよ。なにがあつたか」可愛さと、優しさが垣間見える中、切なさも同居している、そんな笑顔だった。

第一部『合戦』～～（後書き）

これにて、第一部は終了です。ここまでお読みいただき、ありがとうございます。久しぶりに小説を書いたもので、読み返してみると、ひどいな・・・と思いましたワラ
さて、第一部ですが、翔輝の視点で、彼の過去を語ることになります。

冒頭で、なるべく登場人物の心情を描かないと書いた理由がここにあります。

この小説は、過去を語る時のみ、彼らの心情を描き、その後、彼らがどういうストーリーの展開を見せるか、推理小説のように書き進めていきたいと思っていますので。

では、今回はこの辺で失礼させていただきます。

第一部『過去』～プロローグ～（前書き）

ここから第一部です。

まずは、プロローグとして、短めにしてあります。

翔輝の話し口調で綴つてありますので、多少違和感があるかも・・・

申し訳ありません。

第一部『過去』～プロローグ～

んつと・・・なにから話せばいいか・・・?ん・・・じゃあ、俺が、昔、どんなやつだったかつて話から・・・かな?それでいいか?

『ん、いいわよ。最後は亜由美との話に繋がるんでしょ?』
ああ、もちろん。その為に話すんだからさ・・・

昔、つつても、まあ、小学生ぐらいだから10年前くれえ?かな。俺さ、いじめられっ子だったんだよ。典型的な、ね。仲良い幼馴染のやつが、結構リーダー的存在でさ。いるじやん?そういう奴。で、そいつ中心にクラスほぼ全員からセ、まあ、そんな今といじめみたいに自殺するほどじやなかつたけどな。

で、当然それは中学入つてからも続いたわけ。小学校の頃は男が中心だったんだけど、中学からは女が中心だったなあ。つつても、相手にしてねえんだけどさ。ただ、キモイとか言われてただけ。まあ、実際キモかったしな。取り得つつつたら、そそこ成績が良かつたくらい?服装も気い使わなかつたし、運動神経最悪。しかも顔はこのとおりってわけだ。で、喧嘩も弱かつたからセ、親もいじめられないようにつて格闘技やらそうとしたんだけどさ、根性なくて続かねえんだよ。

まあ、そういう感じで、ろくに恋愛とかもしなけりや、女と喋ることもなかつたんだよ。女に興味はあつたけど、そんなんだつたら誰かとイイ感じになることもなかつた。ここまでOK?

『ん、想像つかないけどね。たしかにイケメンつてわけじゃないけど、そんなキモイつてことはないと思つよ』

ハハ、ありがと。まあ今はそういうのが・・・なんつづーか・・・トラウマ?になつてセ、オシャレとか氣を使つよになつたから少しは見れるんじやないかな。

ともかく、まあ、運動神経も悪いってそうつき言つただろ？でも、俺バスケットボールだけは凄い好きでさ、高校行つてもやりたかったわけ。上手いわけじやなかつたんだけど。

で、そのために行きたかつた高校がC大付属。まあ、私立大学付属だけあつて、成績良くなきや入れなかつたんだけど、その代わり、入つた後は、大学にもストレートで行けるは、専用の体育館があるから、遅くまで練習できるわで、バスケやるために高校行きたかつた俺にとつては最高だつたんだよ。あの学校。でも、中学の時の俺は、さつきも言つたけど、そこそこ頭良かつたんだ。でも、とてもじやないけど、入れなかつたから、友達の親に紹介された、進学塾に通う事になつたんだ。親に言われて、さ。で、そこで出会つたのが・・・

『亜由美？』

・・・そうこうこと。

第一部『過去』～2～

俺は中1の時から塾に入つてさ、一番下のクラスから始まつたんだ。で、元々頭は良かつたんだろうな。どんどん上のクラスに上がつていつて、中2で一番上のクラスになつた。だから、全然友達作る間もなく上がつていつたもんだから、そのクラスでも友達はいなかつたんだ。で、そこに入塾してきたのが、岡里だつたんだ。

『で、一田惚れつてやつ?』

『ん、一田惚れつてやつ。だつてや、せつを見て思つたけど、ホントあいつ綺麗じやん?』

『まあ、女から見ても綺麗だとは思つけど』

ん、そう思つよ。で、しかも中学の時と全然変わつてねえんだよ。あいつ。つまり、中学の時に既にあんな感じだつたわけ!

『ん~・・・恐ろしいくらいのマセガキね・・・見た田も中身も』そ。で、意外と子供っぽいとこもあるんだよな、あいつ・・・そこがまたかわいくてさ・・・

『・・・』

・・・そんなに見んなよ。

『いや、キモイよ?なんか。せつきとキャラ違つし・・・』

うつせえな!・・・とにかく、まあ一田惚れしたはいいけどさ、ほとんど初恋なわけ。どうすりやいいかまったくわかんなかつたんだよ。で、しかもそれを好きだつて自覚したのももつと後でさ、そんときは可愛いなあぐらいにしか思つてなかつたんだよ。

『ふうん・・・で?』

で・・・高校入試が終わつて、塾にはほとんど行かなくなつた。元からサボリがちだつたしな。

『はあ?待つて!ちょっと待つて!なんもなかつたの?中2で出会つて、そつから入試まで1年ちょっと!あんた気に入つたんでしょ?—なんもなかつたの?—』

・・・なんか黒田みたいになつてるぞ？喋り方。

『そんなのどうでもいいのよ！元からこんなだし。つてかあんたアホ？！気に入つた相手と喋つたりしないなんてどんだけシャイボーイぶつてんの？！』

だから言つただろ！初恋みたいなもんだつたし、自覚もそんときはまだしてなかつたんだ。たいして、他人に興味もなかつたし。塾行つても勉強するだけで、他の奴とは一切喋つたことなかつたよ。

『・・・嘘でしょ？一切つて・・・どういう中学生だったのあんた・・・』

ま、ともかく・・・それで、高校受かつたことがわかつて、久しぶりに塾行つたんだ。先生に報告するためにね。で、授業はまだやつてたから、とりあえず報告した後、授業を強制的に受けさせられた。

授業終わつた後、帰ろうとしたら、あいつに呼び止められたんだ。受験全員終わつたから、今度皆で打ち上げやろうつてな。で、そんときにはあいつが携帯の番号とアドレスを聞いてきたから教えた。そこで初めて、あいつと仲良くなつたかな。

『・・・あの子から？あの子そういう企画とか、男に自分から誘つたり、番号聞いたりとか絶対しないけど？』

昔は、結構明るい子つて印象あつたけどな。よく笑つてた。大人びてるけど、笑うと幼いつて感じで、ホントそれが可愛かつた。あいつの笑つてる顔、なんかすっげえ好きだつた。

『あの子・・全然笑わないけど・・・』

そうなのかな？今、どんな風に変わつたかは知らないからな・・・なんかあつたんかな？まあ、そういうわけでクラス6人で遊びに行つたんだ。ボウリング行つたりな。で、ちょっとあいつと仲良くなつて、結構そんとき色々喋つた。他の奴は全員男だつたんだけど、なんか俺怖がられてたらしい。

『まあ、その顔でネクラじやねえ・・・完つ全にヤンキーにしか見えないわよ』

お前・・・黙つて聞いてるよ・・・

『ホラ、睨むと怖い! どう見てもヤンキーだったんでしょ? 中学の時は』

・・・「うせえ。いじめられてたからその反動で、ちよつとグレたぐらいだよ・・・

『やつぱり・・・それで?』

で、俺が怖いから誘うのやめよって言われたけど、黙つて誘つたつて言ってた。同じクラスだから仲良くなしたかったって。でも、話しあなたから、打ち上げで仲良くなれたらって。それ聞いて、すげえ好きだと思った。そんなこと言われたこと・・・なかつたらな・・・

『・・・』

それから、たまにメールしたりするよになつたんだけど、告るとかはできなかつたな。遊ぶ誘いもできなかつた。

・・・高校入つてしまらく経つてから・・・俺らの関係は、変わつた。

第一部『過去』～～（前書き）

お久しぶりです。神越優です。

だいぶ間を置いての更新となり、真に申し訳ございません。

実は、私の苦手とするジャンルである、恋愛物であり、新しい試みをと決めての本作品の連載だったため、自分で書きながら、なんてつまらない作品なんだろう・・・と思い、連載を中止しようかと思つていました。

ですが、評価・感想こそないものの、全く更新しなかつたこの1月。本日確認したところ、100ものアクセスがありました。

継続して読んでくださつてる方は少ないのでかもしれません、私にとってこんな嬉しい事はございませんでした。

よつて、本来考へたものよりは短く書き終えるつもりですが、連載を再開しようと思つた次第です。

どうか皆さん、とんでもない駄作になつてしましましたが、何卒お付き合いくだりませ。

第一部『過去』（3）

ん～・・・あれは、俺が高校入ってすぐ・・・だつたかな。バスケ部に入った俺はさ、中学の時にバスケ部だつたつていう女の子と仲良くなつて、すぐ好きになつたんだ。・・・あいつとは打ち上げ以来仲良くなることなんて想像できなかつたからさ。ちょっとヤンキーみたいなのに憧れてるところがあつたその子との方が上手くいきそうだつたから、諦めようと思つてたんだ。

『・・・なつ わけなー。』

・・・そう言つなよ・・・でも、ちゅうじさん時、色々あつてさ、俺だいぶへこんでて、女と付き合つとか考えられなくなつたんだ。

『色々？・・・なによそれ？』

・・・まあ・・・それはまた別の話だから。・・・で、そんな時、

突然、岡里からメールが来たんだ。

『あら？急展開じゃない？』

「遊びに行かない？」

それだけだつた。わかるか？！それだけだぜ？！別に大して喋つた事もない男に、いきなり遊びに行かない？ -とか意味わからんくね？！でもこいつからしたらなんかドキドキしちゃつてさ。とりあえずOKしたんだ。

『・・・ホント急展開・・・でもあの子そういうあるわよね・・・』

・
ん・・・ホントなんつーか・・・無神経？！

『あはは・・・ホントそつかも・・・』

ハハ・・・まあとりあえず、それで待ち合わせして、でもあんまテンションあがんなくてさ、緊張してたつてもあるけど、さつきの色々あつたつてやつのせいだ。だから、あんま時間かけないですぐ帰ろううと思ってたんだ。やっぱ誘われたの嬉しくつてさ、断れなかつた代わりに、早く帰るうつて思つて。

『ふうん……なんかその色々つてのが気になるけど……それで？』

まあ、待ち合わせ場所に着いたらさ、あいつ塾のメンバー勢ぞろいでいるわけや。こっちからしたらハア？！って感じじゃん？！遊びに行こうつてだけだつたから他のやついるとも思わないしせー！マジなんか萎えちゃつてさ。

『……そりや……あんたが勝手に期待して勘違いしただけってのもあるけど……ねえ……』

・・・まあ、そうなんだけど……とにかく、なんか皆でもう一度遊ぼうみたいなことになつて、俺を誘わなのは、みたいなことになつたらしくて、あいつがメールくれたらしいんだわ。でも、俺からしたらそんな気分じやないわけだから、ソッコー帰ろうとしたわけ。そしたらあいつ・・・いきなり俺の事殴つたんだ。・・・グ一で。

『……ハア？！いきなり？！あんたなにしたの？！』

いや、帰るわ、つて言つただけ。そしたらあいつ、「皆でこれから遊ぼうつて時にシラけること言わないの！へこんでるんだつたら、相談してくれればいいじゃん！友達なんだから！」つて言い出したんだ。・・・信じられるか？塾が一緒だつただけで、喋つた事もないし、ほほメールもしない。そんで打ち上げ一回やつただけで、友達！だぜ？こつちがそんなへこむほどでかいことを相談しろ！とか・・・なんだこいつありえねえ・・・つて感じだつたわけ。

『……八方美人……ね』

ハハ・・・そうだな。完つ全に八方美人だな。・・・でもさ、嬉しかつたんだ。なんか、そんなこと言つてくれる女なんかいなかつたからさ、なんか辛かつたし、相談したんだ。色々・・・とさ。それから、かな・・・あいつと、結構メールするようになつたんだ。そんで・・・俺は完全にあいつに惚れた。もづ、さつき話にでた女なんて、いいとか全く思えなくなつたよ・・・

『お前、ホントキッソイ性格してんな。』
「なるほどね。ドMだったってわけね」

第一部『過去』～4～

その日以来、俺はもう完全にあいつとのメールだけのために生きているつて感じだった。部活終つて、クタクタになりながらバスに乗つてさ、携帯とにらめつゝ。なんて送つたら、あいつが楽しいか、そればつか考へて、でもいい感じのが思いつかなくて、結局悩み相談どグチ。愛想つかされるんじやないかって、ビクビクしながら、それでも送つてしまつてた。でも、あいつは一言だけとかばつかだつたけど、必ず返事をすぐ送つてくれてたんだ。それが・・・すつげえ嬉しくて、ドンドン好きになつてくのがわかつた。

『まあ、あの子は元々メール長い方じやないからね』

うん、それは前に聞いたことがある。なんでそんなメール短いし、素つ氣ないんだ?つてさ。そしたら、

「あたし、メール苦手でさ、アハハ」
つてさ。嫌われてんじやないかつて心配してた自分が馬鹿みたいだつたよ。

まあ、そんな関係が一ヶ月くらい続いてさ、いつのまにか夏休みに入つてたんだけど、部活ばつかでさ、どつか遊びに誘う余裕もなかつたんだ。それに、度胸もなかつたんだけど・・・でも、今年もやつてたけど、小江戸祭りつていうのがあるんだ。2つ隣の駅でさ。たまたま友達と行く約束をしてたんだけど、ドタキャンされでさ。ちょうどそん時、メールしてたから断られると思ってたけど、誘つてみたんだ。

『ああ、知つてるよ。その祭り。結構有名だもんね』

ああ。で、あいつの返事、割りとすぐ返つてきてさ。

「いいよ」

それだけだった。

『ア・・ハ・・ハ・・・』

なんか、嬉しかつたんだけど、逆に不安になつてさ。素つ氣ない

んだけどなんでOK？！みたいな。でも、待ち合わせした場所に行つたらさ、向こうのが先に着いてて、俺を見つけた瞬間、パツと笑顔になつてさ、手を振ってくれたんだ。全然素っ気なさのカケラもなくて、一人きりつていう緊張感が、余計増して、力チコチになつちまつたよ。

「相川！急だつたからビックリしたよ！誘つてくれてありがとね！」
つて言いながらさ、俺の手を握つて、いきなり歩き出してさ、なんかもう死んでもいいくらい嬉しかつたよ。

それから、さ。俺はあいつをよく遊びに誘うようになつた。嫌な事がある度に、誘つて、一人で公園のベンチに座つたりしてさ、話を聞いてもらつてた。向こうも、だんだん悩みとか言ってくれてさ、なんかすごい一人でいる時間が好きになつた。

12月、俺はあいつに告つた。なんとかは覚えてない。突拍子もなく、メールで、

「ずっと好きだつた。付き合つてくれないか？」

つて。あいつに彼氏がいたのは知つてた。可愛かつたし、いない方がおかしいつて感じだつたからな。だから振られるのも覚悟してた。
案の定、返事は

「考えさせて」

だつた。先延ばしにして、ウヤムヤにしようつて考えだと思つた。でも、ホッとしたんだ。今までの、心地いい関係がなくなるのはゾッとした。友達でいいから、失いたくなかったんだ。

その後、普段どおり、あいつに呼び出されて、公園であいつの音楽の宿題を手伝つてる時にさ、あいつから告白の話を急にされたんだ。

「あたし、今の彼氏と別れた。年上としか付き合わないつもり」
なんか、落ちていくのがわかつた。暗闇のどん底つづーかさ。もう

なにも耳に入らなかつたし、入れたくなかつた。そうなるのが分かつてたはずなのに、さ。そんな自分もホントに嫌だつた。
「・・・でも、付き合おうと思つてるんだ。この後・・・どうする

？」

あいつは言った。俺は、もう意識なんてほほなかつた。

「帰りうつ・・・」

そう言って、帰つたのは覚えてる。でも、あいつの表情も、そのあと帰り道の様子も全く覚えてない。気づいたら、布団で泣いてたよ。

その後、友達にその話をしたら、言われたんだ。

「お前、それ〇〇Kって意味だつたんじゃねえの？」

つて。まさか、と思つた。年上と付き合おうと思つてるつて意味だろ？つて。でも、よくよく考えたら、ひょっとして？みたいな期待が出てきたんだ。だから、ちゃんと確かめよう。もう一度、今度は顔を合わせて、告ううと思つたんだ。一度振られたようなもんだから、もう怖くないつてさ。

そんな時、ちゅうビクリスマスに会おうつて言われた。嬉しかった。部活が終つて、速攻帰るうとした。

帰り道・・・俺は、ヤンキーにカツアゲされてる同級生を見つけて、そのヤンキーをボコボコにして、警察に捕まつた。

解放されたのは、約束の時間から3時間経つた後。ただ、メールでごめん行けなくなつただけ伝えた。それから、連絡もシカトして・・・今に至るつて感じだ。

『・・・なんで？なんで、シカトしたの？そんな、カツアゲなんて無視すればよかつたのに・・・』

なんで・・・だろうな・・・俺にも、わかんねえよ・・・

第一部『過去』～4～（後書き）

今回で、本作品を凍結することに決めました。

理由は、単純に書けないからです。

申し訳ありません。新しい試み等、やめればよかつたと反省しています・・・

次回作は、一応検討しておりますが、恋愛モノではないことは確実です。

今このメッセージを読んでくださっている方々には、是非そちらを読んでいただきたいと思っております。

それ以降、自信が戻りましたら、改めて続きを書くなり、書き直したりしたいと思っております。

では、いらっしゃらないと思いますが、愛読されていた皆様方、大変申し訳ありませんでした・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2344d/>

恋に愛されない男

2010年11月25日02時49分発行